

9月に全日本マスターズ選手権を開催 連合創立40周年の重み

真夏並みの異常高温に見舞われた5月の日本列島。6月はどうな天候になるのだろうか。水無月は梅雨の季節だが、この頃の天候異変に気を付け、元気で練習に励みたい。各地のマスターズ陸上大会に参加、レースを重ねたうえ、9月の全日本マスターズ陸上競技選手権へ備えよう。同大会は第40回記念国際と位置付け、9月13日から4日間、群馬・前橋市の正田醤油スタジアム群馬で行われる。

40周年記念式典 出席は120人を予定

6月13日は6月号既報の通り、東京都内で日本マスターズ陸上競技連合創立40周年記念式典が行われる。

当日は都内日比谷図書文化館・日比谷コンベンションホールで14時から(一社)健康・福祉総研理事長で元滋賀県知事の國松善次氏が基調講演を行った後、記念式典に移る。北条愁子氏の司会で開式通告の後、物故者の追悼をし、同連合・鴻池清司会長が主催者を代表してあいさつを行う。

全日本マスターズ選手権 40回大会日程・彩った人たち

—— エントリー数は？

「鶴舞う形の群馬県 いつも青春 ずっと青春」

上記の語句は9月13日から群馬県前橋市で始まる第40回記念国際・全日本マスターズ陸上競技選手権大会のスローガンだ。

そう、年齢は関係ない。ハートに“青春”を抱く陸上マンの集いがマスターズ陸上である。すでにWEBによるエントリー締め切りの6月10日、JTBの申し込み締め切りの5月31日は過ぎている。何人が申し込んだのかは、まだまとめられていないので不明だが、大会は4日間の期間なので、かな

りの人数だろう。

447人でスタートした大会は、第10回記念大会(和歌山)で1235人と、はじめて1000人を超えた。第19回大会(沖縄)と第35回大会(岩手)のアジア大会を兼ねた開催を除き、第20回記念大会(熊本)で2192人と2000人超えを記録した。この後、第21～30回大会までは再び1000人台となった。再度2000人を超えたのは第31回大会(東京)。2084人を数えたのだ。この後、第36回大会(岐阜)に2196人が参加。以降、第37回大会(新潟)と第38回国際・大会(和歌山)に2081、2263人が集まった。前年の第39回大会(鳥取)には2015人がエントリーするなど、2000人超えが続いている。

—— 40回大会の競技日程は？

今年の第40回大会の競技日程は、すでにお分かりの人もいるだろう。が、応援の方々を含め、まだお分かりでない人もいるはず。改めて競技日程を紹介しておこう。

ただし、エントリー数によっては、日程を変更する場合があるので、ご注意を。日程は以下の通り。競技日程中の○印は補助競技場、※○印は本競技場と補助競技場を表す。競技開始は各日とも8時30分を予定。第1日のみは15時30分に競技を終了し、17

時30分から前橋さくらホテルで開会式を行い、18時30分から交流会を開く。なお、最終日の閉会式は19時からを予定。正式な競技日程は8月1日(木)以降に決定するので、ご注意。

9月13日(金)▷○60m＝男子・女子、▷1500m＝男子・女子、▷2000mSC＝男子・女子、▷3000mSC＝男子、▷5000m競歩＝男子、立五段跳＝男子・女子、▷砲丸投(2kg、3kg)＝男子・女子、▷○ハンマー投＝男子・女子。

9月14日(土)▷200m＝男子・女子、▷80mH＝男子・女子、▷100mH＝男子・女子、▷110mH＝男子、▷3000m競歩＝男子・女子、▷4×100mリレー＝男子、▷棒高跳＝男子・女子、▷走幅跳＝男子・女子、▷砲丸投(4kg、5kg)＝男子・女子、▷○ハンマー投＝男子・女子。

9月15日(日)▷100m＝男子・女子、▷○800m＝男子・女子、▷3000m＝男子・女子、▷4×100mリレー＝女子、▷走高跳＝男子・女子、▷走幅跳＝男子・女子、▷砲丸投(6kg、7.26kg)＝男子、▷※○円盤投＝男子・女子。

9月16日(月)▷400m＝男子・女子▷○5000m＝男子・女子▷200mH＝男子・女子▷300mH＝男子・女子▷400mH＝男子・女子▷4×400mリレー＝男子・女子▷三段跳＝

男子・女子▷※○やり投=男子・女子。

——大会の優秀選手は？

1980（昭和55）年にはじまった全日本マスターズ陸上競技選手権大会は、第1回大会から15回大会まで男女それぞれの優秀選手を選び表彰してきた。第16回大会を機に新設されたのが、男女を問わず最も活躍した選手に贈る織田賞だ。この大会以降は織田賞、男子・女子各優秀選手賞の3本立てとなって、現在に至っている。

では、これらの名誉ある賞を受賞した選手は一。織田賞の受賞者を紹介してみよう。しょっぱなの第16回大会で射止めたのが大日向暁子さん（長野）だ。以後、女性は4人で7回受賞。大日向さんは16回大会を皮切りに第22、23回大会にて受賞。大日向さんは偉大なジャンパーだった。第16回大会では走幅跳で5m52のW45の世界タイ記録を樹立。

三段跳は11m65の世界新をマークしたのだ。当時、大日向さんは45歳の主婦、公務員で少ない練習時間を有効に生かして活躍。会場は神奈川・平塚競技場。三段跳は従来の世界記録を50cm以上も更新した。長野・松商学園高時代の1966（昭和41）年の青森インターハイでは5m66を跳び、高校日本一になっている。

第17回大会の織田賞は85歳の木村喜三さん（群馬）。81歳の時にマスターズの会員になった木村さんは、白いハチ巻きに赤字で「ロマン」と書き、青春をアピール。今大会では走高跳に1m18、走幅跳で3m23、三段跳は7m18と3種目にM85の世界新を打ち立てた。会場は富山だった。

第18回大会は大分であり、会場をうならせたのは参加最高齢95歳の堤一彦さん（福岡）。M95・100mに全力を傾けて疾走。だが、終盤「ゴールラインを見間違えた」と、ゴール手前7mほどを歩いてしまった。それでも39秒00を更新する38秒82の世

界新を10年ぶりに樹立。会場の拍手を一身に。堤さんは次の沖縄大会でもM95・100mで、37秒26と自身の持つ世界記録を書き替えた。

第20回記念国際大会は熊本で。愛知の50歳・大岩清美さんが投てき種目で大活躍。W50の砲丸投で12m54、ハンマー投が38m39のともに日本新、円盤投に30m28と3種目を制覇。やり投は34m95の2位だったが大会新。織田賞に輝いた。

大岩さんの後は男性の投てきの岡崎正巳さん（鳥取）が岩手会場で織田賞を射止めた。95歳の偉業はM95・砲丸投で5m11、やり投に13m41の2種目で世界新を。これまでの世界記録は4m42と10m32。岡崎さんは前年の熊本大会で砲丸、円盤、ハンマー、やりの投てき四冠を成し遂げている。

続いての第22、23回大会は大日向暁子さんが2、3度目の受賞をした。22回大会の大日向さんは51歳。W50・三段跳で世界初の11m台（11m07）をマーク、23回大会では11m45に伸ばした。

この先は急いで紹介。第24回の石川大会の最優秀選手はM80・2000SCの田茂井宗一さん（80歳・大阪）。10分01秒18と同大会前にあった世界選手権で田茂井さん自身が出した10分02秒43の世界新をさらに更新した。田茂井さんが新記録をつくるまでの公認記録は10分52秒46。いかに田茂井さんの走力がすごかったか。

鹿児島での第25回大会では地元の宮内義光さん（80歳）に輝いた。織田賞に値したのはM80・1500mで5分59秒11の世界新、5000mでは22分04秒20の日本新を樹立したことだ。1500mの公認記録は6分04秒28、5000mが21分57秒88。1500mで世界初の6分台切りは「大声援に背中を押されてのもの」。5000mの日本記録は9年ぶりのもので、800mも2分59秒63の大会新で快勝している。

宮内さんが織田賞を受賞したのは1



回だけではない。25回大会の後、30、35回大会と節目となる大会で輝いているのだ。鹿児島のは30回大会が愛知・名古屋、35回大会はアジア大会を兼ねて岩手・北上で開かれた。30回記念・国際大会となった愛知大会での宮内さんは85歳の節目の年になっていた。

第1日目の800mで3分21秒23の世界新を出して氣勢を上げた。2日目にあった1500mでも6分51秒32の世界新を、最終日の3000mは14分58秒01の日本新で文句なしに“宮内劇場”を演出した。M85の世界記録だった1500mは7分03秒38で22年ぶりの新記録。800mは3分24秒03で、5年ぶりの短縮だった。

岩手会場では90歳になっていた宮内さんが、M90・800mで3分50秒25、1500mでは8分07秒09、5000mが29分59秒94と3種目に世界新を場内アナウンスさせた。同クラスの公認世界記録は800mから4分04秒85、8分07秒17、31分25秒45で800mは5年ぶり、5000mは10年ぶりの更新だった。

以上、宮内さんの「鉄脚」ぶりはお見事の一言につきる。大日向さん、宮内さんを除く第26回大会以降の織田賞受賞者の紹介は次の機会に譲りたい。